

4

定価360円 No.177

ラジオ深夜便

「未知の自分に出会う“老い”」

山田太一 4月からの深夜便 / 西川へレン / 長谷川きよし

放送90年記念 「ラジオと私」読者エッセー入選作発表



【新連載】佐伯泰英「熱海わすれぐさ」 / アンカーと散歩道

老いの暮らしを創る

「家の墓」には入らない？③

83

村田幸子



「跡継ぎ不在」「お一人さま社会」の到来は、安心して死ねない不安と道連れだ。人生の最後を担ってくれる人の不在に直面している人たちは多い。そんな現実にはいち早く目を向け、今の跡継ぎを前提にしている墓のシステムに風穴を開けたのは、新潟市にある妙光寺だ。妙光寺は一九八九（平成元）年、永代供養墓の先駆けといわれる「安穩廟」という新しい形の墓をつくった。

「安穩廟」は宗派を問わず、また跡継ぎがい

なくても利用できる、個人を単位とした會員制の墓である。跡継ぎがいれば、その人が継承することもできる。墓の形も従来とは異なり、斬新だ。直径一メートルの円墳の真ん中に多宝塔があり、納骨堂は百八区画。これが四基あり、満杯後に増設され、現在、契約者数は八百件である。

費用は、永代使用料一区画八十五万円。通信事務費として、年会費が三千五百円。年会費が納入されなくなった場合、十三年間は個

別埋葬が続く、その後中央納骨堂に合祀され、寺によって永代にわたり供養される。

こうした跡継ぎを必要としない新しい形の墓を生み出したのは、現任職の小川英爾さん(六十三歳)だ。安穩廟開設当時、「シングル狙いの寺の新しいビジネス」とか「無縁仏の受け皿」などと言われたという。確かに檀家によって経済的に支えられてきた寺の衰退は、目に見えていた。しかし小川住職が願ったのは、寺としての経済的自立だけではなく、寺

が核となって家族血縁を超えた新しい共同体を目指し、寺自身が変わっていくきっかけをつくりたいということだった。

毎年八月にはフェスティバルが開催され、境内は二百〜三百人の人で溢れ返る。これは合同供養と、いずれは同じ墓に入る人たちの生前交流を目的としたものだ。他に年間を通じて四季折々の行事や研修会、旅行が行われる。企画運営は安穩会員や昔からの檀家さんがボランティアで参加し、支えている。活発

コガミュージアム 催事案内

会場: けやきホール	小企画展	ミュージアム講座
★4月19日(日)・開演午後2時・講師 長田 駿二(音楽文化研究家)	★4月19日(日)・開演午後2時・講師 長田 駿二(音楽文化研究家)	時を超えて愛唱される抒情歌 第16回 横井 弘の抒情歌
★5月16日(土)・開演午後2時・ゲスト 白根 一男、浜村 美智子	★5月16日(土)・開演午後2時・ゲスト 白根 一男、浜村 美智子	合田道人のこのひと、歌暦 第8回 白根 一男、浜村 美智子
★5月30日(土)・開演午後2時・出演 東京大衆歌謡楽団	★5月30日(土)・開演午後2時・出演 東京大衆歌謡楽団	東京大衆歌謡楽団 永遠の古賀メロディーコンサート
★3月31日(火)まで 古賀政男生誕100年記念「日本歌めぐり特別編 古賀メロディー特集」	★4月11日(水)から「古賀政男と明治大学マンドリン倶楽部」	★4月11日(水)から「古賀政男と明治大学マンドリン倶楽部」
●参加をご希望の方は必ずご予約下さい。 ●入場料/2,000円(指定席制) ●当日午前10時から座席指定を受け付けます。		
*催事の詳しい内容や観覧ご希望の方は、お電話でお問い合わせ下さい。		
古賀政男音楽博物館		
TEL 03(3460)9051		
(交通) 小田急線/地下鉄 千代田線 (代々木上原駅) 下車/徒歩3分		
〒151-0064 東京都渋谷区上原 3-6-12		
http://www.koga.or.jp/		

な活動を行い、供養・管理ができるのは、永代使用料の一部を基金として運用しているからで、経理はすべて公開されている。

千葉県松戸市にお住まいの海老原靖紀さん(七十四歳)、泰子さん(七十三歳)ご夫妻は、寺の行事に参加し、去年は旅行で一緒になった人と食事を楽しむまでになった。

新潟市の津野洋子さん(七十三歳)。毎月二回は寺を訪ね、掃除やイベントの手伝いをし、寺友との交流を楽しんでいる。生きていく今の安心感、やすらぎはとても大きいと言う。こうした跡継ぎを必要としない墓は全国に波及し、今は千か所にもほるといわれる。しかし妙光寺のように、本来の寺のあり方を模索し、生前からの交流を大事にしているのは二割程度ではないかと小川住職は見ている。

それどころか、価格破壊が起きている現状だ。これでは単なる遺骨処理場になりかねない。その背景にあるのは、永代供養墓とは何かという明確なルールがなく、法的な位置づけがないことだ。従来の家の墓とは異なる新しい墓が一般化し始めている今こそ、行政はきちんとルールをつくり、法的に位置づけるべきだろう。

家制度はとくに廃止されているにもかかわらず、国は死後のことは家族に任せきりにしてきた。しかし、先祖を敬い、大切に思う気持ちと、墓のシステムは別に考えたい。不安に苛まれることなく、今を充実して暮らせる高齢期をつくりあげることが大事だ。

(むらた・さちこ 福祉ジャーナリスト)